

航空障害灯

結城 文

さやさやと死者らささやく竹落葉踏みて墓苑の奥へと向かふ
飛び石のごとく夕空に浮かぶ雲 幸な記憶へ辿りつけるか

この窓より夕映え見ゆることあらば：と思ふことなく五年が過ぐ
いち日はひと日と過ぎぬ存在の小さき点滅繰り返しつつ

あんなにもヒマラヤ杉が揺れてると見つつ冷房のガラス窓の中
夕空に投げてはしぼる網のやうひるがへり飛ぶ黒き鳥群れ

日の暮れに立つヒマラヤ杉大きき鳥小さき鳥もなべて吸ひ込む
雨雲を誘ふごとしたかむらのその草色の総身のうねり

海底の魚のごとくに横たはるわれの眠りの眠り難しも

眠れざる夜を眠れぬまま起き出でて航空障害灯の赤き灯見つむ